AVOIDABLE DEATHS NETWORK

Junior Champion

MAGAZINE

Vol. 6

October 2026



Artwork: Ngo Hoang Anh Linh, *Our Family in the Storm*



Artwork: Pham Diem Quynh, *A Volunteer's Memory of the Flood*

Children and Youths Stories from Vietnam

Avoidable Deaths Network

ISSN 2759-0380

ADN ジュニア・チャンピオン・マガジン 第 6 巻
ベトナムの子どもと若者によるストーリー

発行日： 2026 年 10 月 2 日
ISSN： 2759-0380

本号は、国連防災機関（UNDRR）が毎年 10 月 13 日に定める「国際防災の日」を記念して発行されました。

巻編集者： Arkoneil Ghosh、Anushka Konar
ゲスト編集者： Dr Tran, To Diem Hang（Flora）
編集諮問委員会： Nibedita Ray-Bennett 教授、Hideyuki Shiroshita 博士

画像クレジット
表紙：© Ngo Hoang Anh Linh、© Pham Diem Quynh；裏表紙：© Le Dang Quang、© Ngoc Duong；記事 1（12 ページ）：© Tran Ha My；記事 5（24 ページ）：© Huynh Minh Thu

Avoidable Deaths Network（ADN）について
Avoidable Deaths Network（ADN)は、多様性、活力、包摂性、革新性を備えたグローバルとローカルをつなぐ会員ネットワークであり、専門家、実務家、研究者が参加しています。私たちの主な取り組みは、低・中所得国において、自然災害、自然要因による産業・技術災害、および人為的災害に起因する死亡や負傷を防ぐことです。ADN は、政策立案者、研究者、実務家、市民がより適切な意思決定を行い、人命を守り、持続可能な開発を実現できるよう支援することを使命としています。この使命は、「仙台防災枠組」の世界的な目標のうち、最初の 2 つの目標と直接的に合致しています。また、ADN は「仙台防災枠組・自主的コミットメント・プラットフォーム」の参加メンバーです。
2023 年 3 月 12 日、ADN は、世界規模の市民参加型キャンペーン「回避可能な死亡に関する国際啓発デー（IAD4AD）」を開始しました。IAD4AD への参加または支援については、以下のウェブサイトをご覧ください。https://iad4ad.avoidable-deaths.net/

発行元：ADN Publication、Avoidable Deaths Network（ADN）
事務所所在地： 関西大学（日本・大阪府高槻市）；レスター大学（英国・レスター）
ウェブサイト： avoidable-deaths.net
お問い合わせ： contact@avoidable-deaths.net

© 2026 Avoidable Deaths Network　すべての作品の著作権は、それぞれの制作者に帰属します。

目次

ADN Junior Champion Magazine 第 6 号の発刊に寄せて 1

ゲスト編集者　巻頭言 4

編集者からのメッセージ 7

歴史に残る嵐 10

嵐と洪水の中の灯火、そしてレジリエンスについての教訓 13

救助ヘリコプター 16

失われたものから希望へ 19

嵐の中の優しさ 22

嵐のあと、新たな試練が始まった 26

赤茶色の濁流が押し寄せたとき―目撃者の視点から 29

嵐から学んだこと 32

ボートを持っておこう！ 35

2020 年中部ベトナム洪水：兵士たちの犠牲 39

停電の夜 43

ADN Junior Champion Magazine
第 6 号の発刊に寄せて

ADN Junior Champion Magazine は、Master Arkoneil Ghosh と Miss Anushka Konar が中心となって主導している画期的なプロジェクトです。彼らは創造性、情熱、そして勇気を通じて子どもや若者たちにインスピレーションを与え、変化をもたらす力強い担い手へと成長を遂げてきました。

この度私たちは、国連防災機関（UNDRR）が定める『国際防災デー（IDDRR）』に合わせ、2026 年 10 月 13 日に第 6 号を発刊できることを大変嬉しく思っております。

ADN Junior Champion Magazine は、2023 年に「Future Leaders Scheme」の一環として創刊されました。以来、気候変動や異常気象、自然災害の影響を受けている子どもたちや若者たちの実体験や思いを発信する重要なプラットフォームとなっています。

各号ごとに専門家監修のもと、タイムリーなテーマを取り上げており、今回の第 6 号では、レスター大学の Dr. Hang (Flora) Tran にご協力いただきました。

今号は IDDRR が掲げる「レジリエンスは家から始まる（Resilience Starts at Home）」というテーマに沿った内容を取り上げています。

子どもたちにとって「家」はすべてです。家は子どもたちの世界そのものであり、大切な思い出をつくり、大きな夢を育む、安全で安心できる場所です。

しかし、世界には気候変動による災害に度々見舞われる地域や災害リスクの高い場所で暮らす子どもたちが数多く存在し、そうした「当たり前の安心」を得ることができない現実もあります。

ベトナムでは、2024 年 9 月の台風ヤギ（Typhoon Yagi）に続き、2026 年 7 月には台風マヤスク（Typhoon Mayask）が襲来し、クアンニン省（Quảng Ninh Province）では激しい雨と洪水が発生しました。また、沿岸部のクアンイェン（Quảng Yên）地域でもその影響を大きく受けました。

これらの台風や洪水は、国内の複数の省で多くの尊い命を奪い、住宅や学校、農地、社会インフラなどに甚大な被害をもたらしました。

本誌では、11 人の若い執筆者が綴った、一人ひとりの切実な『喪失』の物語を紹介しています。学校生活の中断、停電、食料不足など、災害によって激変した日常について、彼ら自身が自らの言葉で語っています。

これらの物語を読むと、胸が締めつけられ、思わず涙をこぼしてしまうこともあるでしょう。

しかし同時にこれらの声は、子どもたちや若者たちの目を通して災害の影響を理解する貴重な機会でもあります。そして何より、そこから私たちが何を学び、災害の影響を軽減するために何ができるのかを考え、行動するきっかけを与えてくれます。

Dr. Tran は、この悲劇をクアンニン省の子どもたちと協力しながら環境保全を推進していくチャンスへと変えてくださいました。どんなにつらい状況下でも私たちは子どもたちのより良い未来を信じ、希望を持ち続けなければなりません。ヒデユキと私は、2 人の愛する娘を持つ親として、こういった現状に重く責任を感じています。ある執筆者が、そんな私たちの思いを見事に表現してくれました。

「私たちを取り巻く、まさにその廃墟から、命は再び生まれようとしていた。」

ベトナムからこれらの物語を集め、本誌のために尽力してくださった編集者の Dr. Tran に、心より感謝申し上げます。

記事を通して、私たちが取材活動の中で感じたたくさんのインスピレーションや勇気、希望を皆さまにも感じていただけますと幸いです。

Nibedita Ray-Bennett 教授、Hideyuki Shiroshita 博士

ゲスト編集者　巻頭言

ベトナム北東部の海岸沿いに位置するクアンイエン（Quảng Yên）は、バクダン川が海へと注ぐ河口域に広がる、標高の低いデルタ地帯の町である。そこには、干潟やマングローブ林、養殖池が織りなす多様な景観が広がっている。この地の人々は何世代にもわたり潮の満ち引きとともに生き、エビやアサリの養殖、河口域での漁業、そして海の脅威から海岸線を静かに守ってくれるマングローブの手入れをしながら暮らしてきた。

しかし、クアンイエンの暮らしを支えるこの地理的条件は、同時に災害に対する脆弱性をもたらしている。西太平洋の台風の通り道に位置するこの町は、熱帯暴風雨やモンスーンによる激しい雨に繰り返し見舞われ、河川の水位上昇と潮位の変化によって水が堤防を越え、農地や養殖池、そして人々の住まいまでもが浸水の被害を受けている。2024 年 9 月、数十年ぶりの勢力でベトナムに上陸した台風ヤギ（Yagi）は、クアンニン省に壊滅的な被害をもたらし、クアンイエンの沿岸地域もまた、猛烈な風と洪水によって大きな打撃を受けた。その後 2 年も経たずして、2026 年 7 月には台風マイサック（Maysak）が再びこの地域に大雨と洪水をもたらした。これらの出来事はクアンイエンの人々にとって、災害が遠い未来ではなく、繰り返される日常の一部であることを改めて思い知らされるものとなった。

こうした災害リスクに加え、クアンイエンはベトナムの多くの沿岸地域と同じように、静かに、けれど着実に押し寄せる現実問題にも直面している。大都市への人口流出、高齢者だけで水産業や農地を守らざるを得ない現状、そして祖父母世代が培ってきた命を守る知恵を直接受け継ぐ機会が減っている子どもたち――こうした社会の変化により、災害の経験や教訓が世代を超えて自然と引き継がれることは難しく

なっている。だからこそ防災は自然と伝わるものと高を括るのではなく、意識的に語り継ぎ、教えていくことが必要である。

私とクアンイエンとの関わりは、防災教育ではなく自然環境の保全に関する研究がきっかけに始まった。マングローブ林や河口域の環境保全に関する情報発信において、没入型技術がどのように役立つのかを探る研究の一環として、私はイエンフン校（Yên Hưng Primary, Secondary, and High School）の教職員と協働するようになった。当初は、生態系に関する物語をどのように伝えるかを探る現地調査に過ぎなかった。しかし、活動を進めるうちにその意味は次第に変わっていった。

教員や生徒、そしてその家族と対話を重ねるなかで、私は同じような話を何度も耳にするようになった。浸水した家、高潮によって失われた農地、そして毎年の台風シーズンがもたらす恐怖や生活の混乱についての話である。これらの話は調査のために自ら語られたものではなく、幾度も災害を経験してきた人々の心の中に今もなお生々しく残る被災の痛みが深く刻まれていたからこそ、自然と語られるものだった。

この地域と意味のある関わりを築くためには、環境保全と災害へのレジリエンスを切り離された問題として扱うことはできないということが次第に明らかになっていった。

私が研究対象としてきたマングローブ林は自然の防護壁でもあり、人々が恐れる台風や高潮から沿岸地域を守る役割を果たしている。つまり、マングローブ林を理解することは、人々の暮らしを脅かす災害について理解することでもある。そこで私たちは、イエンフン校の教員や職員と協力し、生徒たちが経験した洪水や台風の記憶を、どのように教室での学びにつなげられるか模索し始めた。それは生徒たちの

実体験を抽象的な災害に関する情報としてではなく、記録し、語り合い、次の世代へと伝えていく価値のある知識として捉え直すことを目指したものであった。

本特集で紹介するのは、こうした取り組みから生まれた初期の成果である。そこには、沿岸地域を襲う台風について理解を深めようとする、クアンイエンの生徒たちや教育関係者の声が収められている。また、環境保護への理解と地域社会の安全への意識が結びつき始めている様子も伺うことができる。それはささやかではあるが、記憶といたわり、そして世代を超えたつながりを育む営みでもある。その営みを、若い世代が未来へと引き継いでいく。幾度となく水が押し寄せようとも、人々が離れることを選ばず、暮らし続けるこの土地で。

ゲスト編集者：Dr. Tran To Diem Hang（Flora）

編集者からのメッセージ

読者の皆さまへ

『ADN Junior Champion Magazine：ベトナムの子ども・若者たちの物語』第 6 巻へようこそ。本号では、近年ベトナム北部で発生した洪水の影響を受けた子どもや若者たちの実体験と考察を紹介しています。これらの洪水は、住まいや学校、家族、そして地域社会の暮らしに大きな混乱をもたらしました。

編集者として私たちは、こうした若い世代の声を発信する場を提供できることを光栄に思います。彼らの物語は、恐怖や不安、突然生活の混乱を経験したときの記憶から生まれたものです。しかし同時に、勇気、思いやり、適応する力、そして希望についても力強く語っています。これらは、単なる洪水の記録ではありません。安全だという感覚を失うこと、危機のさなかに互いを支え合うこと、そして洪水後に日常生活を再建することの意味を問いかける物語なのです。

本巻を通して、若い著者たちは、洪水が自分たちにとって最も身近な場所にどのような影響を及ぼしたのかを書いています。住まいや持ち物、教育、近隣の環境、家族の日常生活などを振り返り、災害が、慣れ親しんだ場所をほんの一瞬で変えてしまうことを伝えると同時に、家族や地域社会の中にある強さにも光を当てています。それは、共に備えること、適切なタイミングで警報を伝えること、避難すること、互いに助け合うこと、そして力を合わせて復旧しようとする決意の中に見いだされます。

本号は、2026 年の「国際防災の日（International Day for Disaster Risk Reduction）」のテーマである「レジリエンスは家庭から始まる（Resilience Starts at Home）」を反映したものです。災害の影響を最初に受ける場所は、多くの場合、家庭です。し

かし同時に、災害への備えもまた、家庭から始めることができます。家族で地域の災害リスクについて話し合い、非常用物資を準備し、安全な避難経路を確認し、重要書類を保護し、警報に適切に対応することができます。そして、子ども、高齢者、障害のある人、その他の支援を必要とする家族が取り残されないよう、あらかじめ対策を講じることも重要です。

本巻に収められた物語は、レジリエンスが大規模なインフラ整備や制度的な政策だけによって築かれるものではないことを、私たちに思い起こさせてくれます。それは、日々の暮らしの中で培われる知識、コミュニケーション、備え、そして思いやりによっても育まれます。家族が一緒に計画を立て、近隣の人々が互いに助け合い、学校が子どもたちに災害時の対応を教え、若者たちが自分たちを取り巻くリスクを理解し伝える機会を得るとき、レジリエンスは成長していくのです。

子どもや若者は、しばしば被災者として捉えられがちです。しかし、本巻への寄稿者たちは、彼らを観察者であり、情報を伝える担い手であり、学び手であり、レジリエンスを築くための積極的な参加者でもあることを示しています。彼らは環境の変化に気づき、警報がどのように伝えられたかを記憶し、家庭内でどのような不安や恐怖が生じたのかを理解しています。そして、家庭や地域社会をより安全な場所にするために意義ある提案を行っています。

これらの物語は、個人的な体験の振り返りにとどまるものではありません。災害による被害は、決して避けられないものではないという認識を促す呼びかけでもあります。洪水による被害の程度は、事前の備え、情報へのアクセス、住まいの安全性、早期警戒システムの有効性、そして悲劇へと変わる前に家族や地域社会が行動できるかどうかによって左右されます。洪水を実際に経験した人々の声に耳を傾けることで、私たちは防災・保護の仕組みが十分に機能している部分と、依然として課題

が残されている部分を、より深く理解することができます。また、家庭単位の防災対策が、より広範な防災・減災の取り組みの一部として不可欠である理由も、改めて認識できるでしょう。

本巻の実現にあたり、ゲスト編集者である Dr. Hang（Flora）Tran 博士に、心より感謝申し上げます。本巻の刊行に向けたご指導、専門的な知見、そして多大なご尽力に深く御礼申し上げます。ベトナムの子どもや若者たちの経験を丁寧でありのままに、そして明確な目的を持って伝えるうえで、博士の支援はなくてはならないものでした。

読者の皆さまには、ぜひこれらの物語を読み、若い書き手たちの経験と、彼らが代表する地域社会の現実について深く考えていただきたいと思います。彼らの言葉が、家庭、学校、地域社会、政府、そして各種組織に対し、レジリエンスは災害が発生した後に初めて築かれるものではないと気づくきっかけになることを願っています。それは、知識を深め、誰も取り残さない姿勢を大切にし、事前の備えを整え、一つひとつの家庭で適切な選択を重ねることによって、災害が起こる前から育まれるものなのです。

Arkoneil Ghosh、Anushka Konar

歴史に残る嵐

Tran Ha My

2025 年 4 月のことを、私はよく覚えています。その月、私が住んでいるクアンイエンに、とても大きな嵐がやって来ました。嵐が来る数日前からテレビや携帯電話で嵐についてのニュースが何度も流れていました。お父さんとお母さんは、ドアをしっかり閉めたり、家の近くの木の枝を切ったり、水や食べ物を多めに用意したりして、急いで準備をしました。それでも私はとても不安でした。こんなに近くで、こんなにこわい自然災害を経験するのは初めてだったからです。

嵐が来た夜、風はものすごい勢いで吹きました。外から風の大きな音が聞こえ続け、私は眠れませんでした。激しい雨がトタン屋根や窓に打ちつけていました。電気が消えると、家族みんなで懐中電灯の明かりの下に集まりました。外で大きな音がするたびに、私はこわくなりました。早く朝になって、嵐が過ぎてほしいと願っていました。

次の朝、嵐が弱くなったので外に出ました。そこで見たものに、私はびっくりしました。たくさんの木が根から倒れ、道路をふさいでいました。近所には、屋根が飛ばされた家もありました。私の家の庭も、葉っぱや折れた枝でいっぱいでした。私の家族は幸い、あまり大きな被害を受けませんでした。でも、近所にはもっと大変な思いをした家族がたくさんいました。家がひどく壊れた人もいて、元の生活に戻るまで何日も片づけなければなりませんでした。

その後の数日も、とても大変でした。道を通るのが難しく、電気や水も何度も止まりました。私の学校も被害を受けたため、しばらく授業がありませんでした。でも、私が一番よく覚えているのは、大変だったことだけではありません。みんなが助け

合っていたことです。近所の人たちが片づけを手伝いに来てくれました。親切なボランティアや救助隊の人たちも来て、困っている人たちを助けてくれました。私もお父さんとお母さんと一緒に庭を掃き、枝を拾い、自分にできることを手伝いました。

あの嵐を経験して自然災害はいつ起こるかわからないと気づきました。だから自分や家族を守るために、前もって準備しておくことが大切です。また、大変なときにはみんなで力を合わせることが本当に大切だと学びました。お互いに気を配り、助け合えば、被害を小さくすることができます。

これからは自然災害が起きたときにどうすれば良いかを学ぶ活動が、もっと増えてほしいです。友達にも伝えたいことがあります。天気の警報を決して無視しないでください。常に準備をして、大人の話をよく聞いてください。

去年の嵐は、私を不安にさせ、こわい思いをさせました。でも同時に、もっと勇気を持つこと、自分が持っているものを大切にすること、そして大変なときの優しさがどれほど大きな力になるかを教えてくれました。



出典：© Tran Ha My

洪水被災地への支援活動（Tiếp Tế Vùng Lũ / Flood Relief Efforts）

生徒によるコメント：「洪水の水は、最後には引いていきます。でも、人々の優しさや、分け合う心、助け合う気持ちはいつまでも残ります。それが、洪水から私が学んだ一番大切なことです。」

（小学 5 年生、イエンフン小中高等学校、クアンイエン）

嵐と洪水の中の灯火、そしてレジリエンスについての教訓

Ngo Hoang Anh Linh

私はベトナム中部の海沿いにある省で生まれ育ちました。そこでは毎年の台風シーズンが訪れるたびに深い爪痕が残されます。しかし、今でも決して忘れることのできない出来事は、2 年前に故郷を襲った歴史的な大嵐です。

嵐の警報サイレンが鳴り響き続ける中、空は暗くなり、風はドアの隙間という隙間を吹き抜け、不気味で身のすくむような音を立てていました。氾濫した水はわずか数時間のうちに急速に水位を上げ、村の道路全体をのみ込み、私たちの家の庭にまで流れ込んできました。濁った水が渦を巻きながら勢いよく押し寄せてくるのを目の当たりにし、当時まだ幼かった私は、自然の猛威を前に、ただ戸惑いと恐怖を感じるばかりでした。

その嵐によって、私たち家族の日常生活は完全に断ち切られました。停電が起こり、携帯電話の電波も弱まった末に途絶え、私たちの家は四方を水に囲まれた孤島のようになりました。学校も深く浸水したため、勉強をしばらく中断せざるを得ませんでした。教科書や学用品は、棚の高い場所に移していたにもかかわらず、湿気によって傷んでしまいました。最も深刻だったのは、洪水に閉じ込められて 3 日が過ぎる頃には、飲み水や食料の備蓄が徐々に底をつき始めたことでした。

そんな困難の中、家族の絆と助け合いこそが私たちを支える何よりの命綱となりました。父は胸の高さまで水に浸かりながら、強風で吹き飛ばされたトタン屋根を修理しました。一方、母は限られた飲み水を少しずつ大切に使い、残された小さなガスコンロで、湯気の立つインスタントラーメンを作ってくれました。

夜になると、家族全員が揺らめくろうそくの明かりを囲み、寒さや恐怖を紛らわせるために語り合いました。

やがて水が引き始めると、そこに残されていたのは、まるで戦場のような泥とごみの山でした。しかし、近所の人々が互いに声を掛け合い、ある人は泥を掃き出し、別の人は壊れた家を修繕する姿を見て、私は気づきました。私たちの周りに広がる廃墟の中から、再び命と暮らしがよみがえろうとしていたのです。

今では、私の故郷は再び緑に包まれ、家々も以前より頑丈に建て直されました。あの嵐の日々を乗り越え、私たち家族の暮らしも、ようやく落ち着きを取り戻しています。

あの嵐と洪水を経験して、私は一つのことを学びました。自然災害は、私たちの財産を奪い去ることはできても、人間の意志までは決して打ち砕くことはできないということです。

この経験から私が得た最も大きな教訓は、常に主体的に行動し、決して油断しないことの大切さです。もし将来同じような災害が起きたなら、私は今回よりもはるかに入念な備えをするでしょう。予備の電源や飲料水を備蓄することはもちろん、基本的なサバイバル技術や応急処置の知識も身につけておきたいと考えています。

私は、地域社会や地方自治体に一つ提案したいことがあります。それは、若者を対象とした実践的な防災訓練をもっと頻繁に実施すること、そして、住民が余裕を持って避難できるよう、スマートフォンのアプリなどを活用した高度な早期警報システムを整備することです。

同世代の若者たちに、私が伝えたいメッセージは次のとおりです。

「自然災害は試練です。しかし同時に、それは人と人との団結力を映し出す鏡でもあります。常に知識を身につけ、前向きな心を持ち続け、他者と助け合う準備をしておきましょう。なぜなら、私たち若い世代こそが、人生に訪れるどんな嵐からも、家族や地域社会を守る最も頼もしい盾となるからです。」

救助ヘリコプター

Ngoc Duong

9 月のある午後、私の住むクアンイエンで激しい雨が降り始めました。最初はただのいつもの嵐だと思っていました。ベトナムではこの季節になると嵐がよくやって来るからです。しかし間もなくラジオから「ヤギ」と呼ばれる非常に強い台風が接近しているという知らせが聞こえてきました。

風はますます強くなり、窓の外の木々は左右に大きく揺れていました。やがて川の水位が上がり始め、茶色く濁った水が勢いよく通りに流れ込んできました。洪水がひどくなっていたため、両親は妹と私に家の中にいるように言いました。水位はどんどん上がり、ついには家の階段にまで達しました。あれほど恐ろしい思いをしたことはありませんでした。

嵐が続くにつれて水位はさらに上昇したため、家族は家の中で最も高い場所である 2 階へ移動することにしました。近所の多くの家も水に囲まれ、一部の家族は私たちと同じように 2 階へ避難しなければなりませんでした。近所の人たちは、みんなが無事かどうかを確かめるため、窓越しに互いに声を掛け合っていました。

突然停電が起こり、ニュースを見ることもインターネットを使うこともできなくなりました。父は、食料、飲み水、薬、懐中電灯、電池を防水バッグに詰めました。私たちは落ち着いて行動し、2 階で救助を待つことにしました。

翌朝、水位はさらに深くなっていました。窓からはほとんど水没したバイクや、通りを漂う木材の破片が見えました。そのとき、小さなボートに乗った救助隊員たちが、人々を家から救出しているのが見えました。

その後、ヘリコプターが私たちの地域の上空を飛び、浸水した家から自力で脱出できないお年寄りを救助するため、救助かごを下ろしました。そのヘリコプターを見て、私は希望を感じました。私たちはまだ 2 階で無事に過ごせていましたが、それでも多くの人々が私たちを助けるために命がけで活動しているのだと分かったからです。

私たちは2日間、2階で過ごしました。食料を大切に分け合い、小さな電池式ラジオでニュースを聞きながら過ごしました。母は、私たちが水の上で安全かつ濡れずに過ごせているのは幸運なことなのだと、何度も妹と私に言い聞かせてくれました。

ようやく洪水の水がゆっくりと引き始め、私たちのような家族の様子を確認するために、ボートがやって来ました。

水が完全に引いた後に、私たちが 1 階に降りてみると、床は泥だらけになっていました。多くの本や家具が使い物にならなくなり、掃除には数日かかりました。学校も教室の一部が浸水していたため、修理が必要でした。クラスメートたちも、学用品やペット、果樹を失ったと話してくれました。

大変な時期でしたが、先生たちは私たちに、強い気持ちを持ち続け、互いに助け合うようにと教えてくれました。近所の人々も協力して通りを掃除し、私たちよりも多くのものを失った家庭を支援しました。

この経験を通して、私はヤギのような台風は突然やって来ることがあるため、どの家庭も常に備えておかなければならないと学びました。非常用持ち出し袋を準備し、気象警報に注意し、洪水が始まったら早めに家の最も高い階へ避難するべきです。

将来、クアンイエンにより頑丈な堤防と、より優れた警報システムが整備されることを願っています。

ほかの子どもたちにもこう伝えたいです。

「嵐の警報を決して無視しないでください。早めに備え、互いに助け合えば、どんなに恐ろしい洪水でも、みんなで乗り越えることができます。」

失われたものから希望へ

Le Phuoc Thao Uyen

クアンイエンは台風や洪水がよく発生する地域です。毎年、台風の話を耳にしていたので、私はそうした災害にも慣れているつもりでした。しかし雨が降りやまず、川の水位が急激に上昇したある大洪水のことは決して忘れられません。自然災害がわずか数日で人々の生活をどれほど大きく変えてしまうのかを、私はそのとき初めて本当の意味で理解しました。恐怖と同時に分かち合うことや希望について、多くの大切な教訓を学びました。

洪水が起こる前は、昼も夜もずっと雨が降り続いていました。当初、家族はただのいつもの雨だと思っていました。しかしある夜、水位があまりにも急速に上昇し、庭が水浸しになったかと思うと、ついには家の中にまで水が入り込んできました。

私たち家族は急いでテーブルや椅子、冷蔵庫などの大切なものを高い場所へ移しました。停電に備えて食料や飲み水、懐中電灯、モバイルバッテリーも準備しました。外を勢いよく流れる泥水を見て私は不安になり、少し怖くなりました。ただ雨が早くやみ、すべてが元どおりの日常に戻ってほしいと願うばかりでした。

洪水が続いた数日間は、最もつらい日々でした。安全確保のために電気が止められ、携帯電話の電波も途切れ途切れになっていました。移動手段はボートしかなく、救助隊や近所の人々が移動を助けてくれました。水位が高すぎたため、何日もの間、孤立してしまった家族もいました。

しかし、誰もが大変な状況に置かれていたにもかかわらず、人々は互いを気遣い続けていました。インスタントラーメンを持っている家庭は、食料のない家庭に分け

与えました。ボートを持っている人々は、お年寄りや小さな子どもたちを安全な場所へ運ぶのを手伝いました。

今でも、兵士や警察官、ボランティアの人々が、雨や風の中を出て行き、みんなに食料や生活必需品を届けていた姿を覚えています。その光景を見て、私は、最も困難なときにこそ、人の優しさが私たちを強くしてくれるのだと理解しました。

何日も経つと、ようやく水が引き始めました。しかし、洪水は大きな爪痕を残していきました。庭や家の中は泥だらけになり、多くのものが壊れ、木々も倒れ、勉強や日常生活にも支障が出ました。

私の家族や近所の人々は、朝から晩まで家の掃除をしました。みんなとても疲れていましたが、それでも互いに励まし合い、作業を続けました。私は人々が協力し、助け合う姿を見て、団結すればどんな困難も乗り越えられるのだと実感しました。

あの洪水を経験し、自然災害は誰も望まないものですが、早めに備え、警報に耳を傾け、環境を大切にすることで、被害を小さくできると学びました。

また、十分な食事ができること、電気が使えること、雨風をしのげる家があることなど、何気ない日常のありがたさにも気づきました。そして何より、人と人との間にある愛情や、互いに分かち合うことがどれほど大切なのかを理解しました。

私は将来、クアンチ省の人々が自然災害による被害を少しでも減らせるよう、さまざまな支援プロジェクトが増えることを願っています。また、若い世代に災害を防ぐ方法や、災害が起きたときの対処法について、より多くのことを学んでほしいと思います。そして、みんなで協力して環境を守り、より安全な地域社会を築いていきたいです。

自然災害は、喪失や苦難をもたらすことがあります。しかし私は、団結する心、思いやり、そして希望があれば、私たちはどんな困難をも乗り越え、必ず明るい未来へと歩んでいけると信じています。

嵐の中の優しさ

Huynh Minh Thu

時がたてば、様々なことを忘れてしまうものです。しかし雨季が来るたび、私は 2023 年のある朝のことを思い出します。当時、私はまだ 11 歳で家族と一緒にフアン・ニンに住んでいました。そのとき私は初めて「台風 1 号」という大きな嵐を経験しました。私の心に深く刻まれたのは、強風や折れた枝で埋め尽くされた道路の光景だけではありません。人と人との助け合いや思いやりの大切さを、初めて心から実感したことも忘れられない経験となりました。

台風が来る数日前から、大人たちは「とても大きな台風が来るらしい」と話していました。当時の私は、台風といえば激しい雨や強い風が吹き、学校が何日か休みになるくらいのものだと思っていました。むしろ、いつもより長く家で過ごせることがうれしくて少しわくわくしていたほどです。けれども、その年の 8 月 2 日の朝、私の考えはすっかり変わりました。

今でも、外で風がうなり声を上げる音で、早朝に目が覚めたことを覚えています。窓はガタガタと揺れ、トタン屋根が大きな音を立てるたびに、私はびくっとしました。両親はドアがしっかり閉まっているか確認したり、カーテンを閉めたりしながら、私に窓ガラスから離れているように言いました。両親の顔に本当の不安が浮かんでいるのを見たのは、そのときが初めてでした。その瞬間、私はようやくこの台風が自分の想像していたようなものではないと気づいたのです。

停電になると、家の中は小さな懐中電灯の明かりだけになりました。テレビもインターネットも使えず、私はただ両親のそばに座り、外で吹き荒れる風の音を聞いているしかありませんでした。

私は何度も母に「いつになったら台風は終わるの？」と尋ねました。母はほほ笑みながら私の髪を優しくなで、「もうすぐ終わるからね」と言ってくれました。その言葉を聞くと、不思議と気持ちがずっと落ち着きました。

ようやく台風が過ぎ去り、父と一緒に外へ出たとき、目の前の光景に私は言葉を失いました。いつも見慣れていた道路は、折れた枝で埋め尽くされていました。木が根こそぎ倒れ、道路をふさいでいるところもありました。トタン屋根が風に吹き飛ばされた家もあれば、看板が斜めに傾き、屋根のほとんどを失ってしまった家もありました。いつも活気にあふれていた近所の風景は、突然静まり返り、人けのない場所のように見えました。

しかし、そんな光景の中で、私は何よりも美しいものを目にしました。それは近所の人たちが誰かに頼まれるまでもなく、互いに助け合いながら片づけを始めていたことです。若い男性たちは協力して倒木を切り分け、道路を通れるようにしていました。一人の女性は停電で料理ができなかった家庭に温かいおかゆを配っていました。

私も父と一緒に枝を拾い、家の庭を掃除しました。一つひとつは小さな作業でしたが、自分も近所の人たちの力になり、少しでも早く元の生活を取り戻す手助けができていると思うとうれしくなりました。

その日、私は本当の強さとは、ただ自然の猛威に立ち向かうことだけではないのだと学びました。最も苦しいときにこそ、人々が互いに支え合うこと。それこそが、本当の強さなのだと気づいたのです。

台風 1 号が過ぎ去ってから、もうずいぶん時間がたちました。今の私は台風が来ると学校が休みになることを期待していたあの 11 歳の少女ではありません。

今では雨季になると、天気予報をこまめに確認し、家族と一緒に必要なものを準備したり、親戚に注意するよう声をかけたりしています。

そして何よりも、自然災害を乗り越えるために本当に大切なのは、落ち着いて行動すること、事前に備えておくこと、そして周りの人と助け合うことなのだと学びました。

嵐は木をなぎ倒し、屋根を吹き飛ばすことはできても、人の優しさまで洗い流すことはできません。

そして、人々が互いに助け合おうとする気持ちを持ち続ける限り、どんな嵐のあとでも、私たちには必ず、もう一度立ち上がるための希望があるのだと私は信じています。



出典：フイン・ミン・トゥー撮影の写真（© Huynh Minh Thu）

クアンニン省における台風 1 号の被害の様子

（中学 3 年生／イエンフン小中高等学校／クアンイエン）

嵐のあと、新たな試練が始まった

Nguyen Quoc Bao Ngan

自然災害について最も恐ろしいことは何かと以前の私に尋ねたなら、私はおそらく激しく吹きつける風や、激しい雨、あるいは荒れ狂う洪水だと答えたでしょう。しかし、実際に自分自身で大きな嵐を経験してみて、最も大変なことは災害が起きている最中ではないのだと気づきました。本当に大変なのは、災害が過ぎ去ったあとの日々であり、残されたもので皆が生活を立て直し始めなければなりません。

嵐が上陸したとき、私の家族が考えていたことは、全員の安全を確保することだけでした。私たちはドアをしっかりと閉め、電気を切り、懐中電灯を用意して、小さな部屋に身を寄せ合いました。うなりを上げる風、屋根を激しくたたく雨、そして外で木々が折れる音に、家族全員が不安を感じていました。誰もあまり話しませんでしたが、心の奥ではみんなが心配していることが分かりました。夜明けに風がようやく弱まり、私たちはやっと外に出る勇気を持つことができました。

そこで目にした光景は、私たちがよく知っている街並みとはまったく違っていました。見慣れた道路には、折れた枝やごみが散乱していました。屋根が吹き飛ばされた家もあり、浸水のために営業を休まなければならない店もたくさんありました。電気と水道の供給は止まり、嵐による被害のために携帯電話の電波さえも途切れ途切れになっていました。いつもの生活は、私が想像していた以上に不便で困難なものになってしまったのです。電気が使えること、日常生活に必要なきれいな水があること、十分な食事ができることなど、これまで当たり前だと思っていたものが、突然、ありがたいと感じられるものになりました。

その後の日々は、私にとって最も強く記憶に残っています。私は、両親が毎朝早く起きて家の掃除をする姿を見ました。普段は毎日軽くあいさつを交わすだけだった近所の人たちが、今では一緒に道路を掃き、倒れた木の幹を切断し、より深刻な被害を受けた家庭を助けていたのです。パンを届けてくれる人もいれば、ボトルの水を配る人もいました。発電機を貸してくれる人さえいました。そのとき、誰も相手と親しいかどうかを尋ねませんでした。なぜなら、誰もが理解していたからです。最も大切なのは、嵐のあとの困難をみんなで力を合わせて乗り越えることを。

助け合いはただ本の中で知るようなことだけじゃないんだと、私はその時初めて実感しました。それは、自分自身も苦労しているときに、進んで他人を助けようとすることです。今でも、古いほうきを使って隣人の家の前の道路を掃いていた年配の男性の姿や、道路を再び機能させるために、雨の中で倒木を取り除いていた若いボランティアたちの姿を覚えています。そうした行動は小さなことに見えたかもしれません。しかし、混乱の中で、それらの光景は私の心を温かくしてくれました。

この災害を経験してから、私の人生に対する考え方も変わりました。以前の私は、ほんの数分間停電しただけで不満を言ったり、少し雨が降っただけで予定が台なしになったと文句を言ったりしていました。しかし、この経験を通して、私は必要なものがすべて手に入る生活に慣れすぎていたことに気づきました。そして、多くの人々にとって、家全体や持ち物のすべて、あるいは唯一の収入源さえも、一晩で失われてしまう可能性があることを忘れていたのです。私は、しっかりとした屋根のある家に住めること、家族と一緒に食事をすること、そして嵐のない穏やかな一日を過ごせることなど、ささやかなことにもっと感謝するようになりました。

また、この経験は自然災害そのものを完全に防ぐことはできなくても、被害を減らすための備えはできるということも教えてくれました。天気予報をこまめに確認す

ること、必要な物資を準備しておくこと、基本的な災害対応の技術を学ぶこと、そして地域当局の指示に従うことは、どれも非常に重要です。それに加えて、気候変動の影響によって異常気象がますます頻繁に起こるようになっているため、私たち一人ひとりが環境保護について、より意識を高めるべきです。

今でも、ニュースで嵐の警報を見るとき、私はもはや風速や降雨量のことだけを考えるわけではありません。屋根を補強しようと急ぐ家族や、作物のことを心配する農家の人々、そして災害のために学校を休まなければならないかもしれない子どもたちのことを考えます。今では、どの嵐の背後にも、語られることのない無数の物語があるのだと理解しています。

もし、ほかの若い人たちにメッセージを伝えられるなら、私はこう言いたいです。平穏な日々を大切にし、自然災害を決して軽く考えないでください。自分自身と家族を守るために必要な知識や技術を身につけてください。そして何よりも、困っている人々と助け合うことを学んでください。時には、相手を気遣うちょっとした声かけや、小さな親切、あるいは適切なタイミングでかける励ましの言葉が、誰かが最もつらい日々を乗り越えるために必要な力になることがあります。

なぜなら、どんな嵐のあとでも、人々が再び立ち上がるために本当に必要なのは、建て直された家だけではなく、地域社会全体の愛情と支え合いだからです。

（高校 1 年生；イエン・フン小中高一貫校；クアンイエン）

赤茶色の濁流が押し寄せたとき
―目撃者の視点から

Pham Diem Quynh

私はベトナム中部にある、太陽に焼かれ、強風にさらされるあの土地で生まれたわけではありません。しかし、その年の洪水が最も激しかった時期に、ハティン省フオンケーへボランティア活動に行ったことが、自然災害についての私の考え方を大きく変えました。その年は記録的な洪水が発生した年で、きっと一生忘れることはないと思います。自然の破壊力を、テレビ画面越しではなく、自分の目で直接目撃したのは初めてでした。一晩中、激しい雨が降り続いた後、上流から大量の水が押し寄せ、赤茶色の濁流が農村一帯をのみ込んでしまいました。高台に立ち、外の世界から完全に孤立してしまった村を見下ろしながら、私は息が詰まるような恐怖と、どうすることもできない無力感に襲われました。

水位が最も高かった数日間、人々の生活は一変しました。電気は完全に止まり、携帯電話の電波も途切れたり、つながったりを繰り返していたため、救助隊に連絡を取ることは非常に困難でした。移動するには、水の中を歩くか、波の間を漂う小さくて頼りないカヌーに何とか乗り込むしかありませんでした。何より恐ろしかったのは、飲み水や食料が不足していたことです。高齢者や幼い子どもたちが屋根の上に上がり、救援物資を求めて手を振っている姿や、乾燥したインスタント麺を半分に折っただけの食事を、家族が急いで食べている姿を見るのは、本当に胸が痛みました。

しかし、まさにその絶望的な状況の中で、私は人の優しさの深さを目の当たりにしました。地元の行政機関やボランティア団体の救助船は、波をかき分けながら、洪

水被害が最も深刻な地域へと何度も進んでいきました。嵐がようやく過ぎ去ると、そこには泥やがれきが散乱した荒れ果てた光景が残されました。それでも村人たちはくわやシャベルを手に取り、力を合わせて片づけを始めました。その後、村は再び活気を取り戻しましたが、あの年に受けた傷跡は、今も私の心に深く刻まれた記憶として残っています。

私が最も鮮明に覚えているのは、ほかの人たちと一緒に、ある小さな家から泥をかき出す作業を手伝ったことです。その家の持ち主は、高齢の女性でした。持ち物のほとんどが台無しになってしまったにもかかわらず、彼女は何とか笑顔を浮かべ、みんなが無事でさえいれば、ほかのものは何でもまた元どおりにできると言いました。その何気ない一言に、私は言葉を失いました。そのとき私は、災害から人々が再び立ち上がるために本当に必要なのは、物資による支援だけではなく、周囲の人々からの励ましや寄り添う気持ちなのだと気づきました。

このボランティア活動は、どんな教室でも学ぶことのできない教訓を私に与えてくれました。自然災害に直面したとき、何よりも危険なのは、備えを怠り、危険を軽く考えることだと理解しました。もし将来、同じような状況に遭遇することがあれば、誰もがもっと十分な備えをしておくべきだと思います。懐中電灯、薬、保存のきく食料などを入れた「非常用持ち出し袋」を用意し、家の中で最も高い場所に保管しておくことが大切です。また、地方自治体は、洪水時の避難場所として、浮き家や頑丈な地域の避難施設をもっと整備するべきです。

最後に、ほかの若い人たちに伝えたいことがあります。自然災害は家を押し流すことはできても、互いに助け合う人々の心まで打ち砕くことはできません。環境破壊をやめ、もっと多くの木を植え、災害から身を守るための知識や技術を身につけま

しょう。なぜなら、自然を守ることは、結局のところ、自分たち自身の命を守ることにつながるからです。

（高校 2 年生；イエンフン小・中・高等学校；クアンイエン）

嵐から学んだこと

LuTrung Son

自然災害は突然襲いかかり、予想もしなかった形で人々の生活を変えてしまうことがあります。私にとって、特に鮮明に記憶に残っているのは、2022 年にダナンを襲った嵐です。当時、私は家族とともにダナンで 2 年間暮らしており、その年の 10 月は決して忘れることのできない月となりました。

その嵐は非常に強力で、激しい雨と強風をもたらし、街は大きな混乱に陥りました。私と家族にとって、それはただ数日間の困難を乗り越えれば済むというものではありませんでした。事前にはあまり考えていなかったことですが、結果的に、私の考え方にも大きな影響を及ぼすことになったのです。

実際に嵐が襲ってきたとき、天候は本当に恐ろしいものへと変わりました。風は何時間も激しくうなり続け、雨も一向にやむ気配がありませんでした。ダナン市内の道路はあちこちで冠水し、移動することがほとんど不可能になりました。地域によっては停電が発生し、インターネットもつながらなくなりました。

私たち家族は家の中にとどまり、安全を確保しながら、どのような被害が起きても対応できるように備えていました。私はそれまで、これほど深刻な嵐を経験したことがなかったため、その間ずっと不安を感じていたことを覚えています。家族の安全が心配だった一方で、学校のことや、勉強にどれほど遅れが出てしまうのかということも、すでに気になっていました。

その心配は、残念ながら現実のものとなりました。

嵐の影響で、生徒や教師の安全を守るため、学校はしばらく休校となり、授業が中止され、いつものように学校に通うことができなくなりました。オンライン授業に切り替わった後も、インターネットの接続が不安定だったため、授業にきちんと参加することさえ難しく、ましてや、先生が説明している内容についていくことなど、とてもできませんでした。

それに加えて、停電のため、ノートパソコンを充電できなかったり、まったく使えなかったりすることもありました。その結果、提出しなければならない課題の中には、どうしても後回しにせざるを得ないものもありました。

こうして少しずつ、普段なら期限までに終えられるはずの課題に遅れが出るようになってしまいました。

しかし、影響を受けたのは勉強だけではありませんでした。

嵐の最中からその後にかけて、私の家族はさまざまな被害への対応を迫られました。強風によって屋根や塀の一部が損傷し、修理が必要になりました。また、普段なら何でもない日常生活も、ずっと不便なものになりました。

外出するのは危険で、多くの店が閉まっていたため、基本的な食料品を買うことさえ困難でした。

それでも、私たちは家族で支え合いながら、なんとかその状況を乗り越えました。天候が回復すると、生活も少しずつ普段の状態に戻っていきました。

今振り返ると、この経験を通して、ほかの状況では学べなかったであろう大切なことをいくつか学んだと思います。

まず、自然災害への備えを決して軽く考えてはいけないということです。実際に災害が起きるまでは、それほど深刻な事態にはならないだろうと考えてしまいがちです。しかし、いざ災害が発生すると、その考えがいかに甘かったかに気づかされます。

また、困難なときに人々がどれほど互いに支え合っているか、そして、みんなが協力することで状況がどれほど改善するかということも、改めて実感しました。

もし今後、同じような災害が起きたら、私は事前に必要な物資を準備し、大切なものを守り、勉強の予定にも余裕を持たせるようにしたいと思います。

これからは、私たちの地域社会、特に学校が、このような事態への備えをさらに充実させていくことを願っています。例えば、緊急時の対応について、より分かりやすい指示を出すことや、対面授業ができない状況でも生徒が学習を続けられるよう、より優れた仕組みを整えることなどが必要だと思います。

同年代の人たちに、この経験から何か一つ学んでほしいことがあるとすれば、それは、冷静さを保ち、責任ある行動を取り、困難なときには進んで他人を助けることです。

2022 年にダナンを襲った嵐は、乗り越えるのが大変な経験でした。しかし、今振り返ってみると、その経験は私を以前よりも困難に負けない人間に成長させ、これから何が起きても対応できるよう、より多くの備えをするきっかけにもなりました。

(高校 3 年生／イエンフン小・中・高等学校／クアンイエン)

ボートを持っておこう！

Le Dang Quang

2025 年 9 月下旬、台風ラガサがクアンニン省に上陸し、何日も雨が降り続きました。その結果、川の水が堤防を越え、私たちの町のような地域は何日間も水に覆われました。

父が港で船舶整備士として働くことになり、私たち家族がクアンニン省に引っ越してきたのは、そのわずか数か月前のことでした。そのため台風が襲ったとき、私はまだこの地域のことをよく知らず、少しずつ道や周囲の様子を覚えているところでした。

今でも最も鮮明に覚えているのは、雨の音です。三日間一度もやむことなく降り続いた雨が、トタン屋根を激しくたたき、家族の誰も眠れないほどでした。二日目の朝には、外にあった道路は、もはや道路ではなくなっていました。そこには茶色く濁った水がゆっくりと流れ、玄関先ではすでに足首を越え、さらに水位が上がり続けていました。

そのとき、近所の家の息子が古い木造のボートを持って現れました。大人 2 人が乗るのもやっとという小さなボートでした。彼は、もう少し先にある家々の様子を確認しに行くので、一緒に来ないかと私に尋ねました。

私はボートの前に座り、彼は私の後ろに座りました。彼は折れた木の枝を使ってボートをこいでいました。本来のオールは、何週間も前になくしてしまっていたのです。

私たちは、自分たちの家の門のすぐ前からボートを出しました。

まだ見慣れない道路標識の横を、水に浮かびながら通り過ぎるのは、不思議な感覚でした。まだ半分しか水面から出ていない標識を見つめながら、私は思いました。ここは、まだよく知らない土地なのに、もうその半分が水の中に沈んでしまっているのだ、と。

さらに先へ進むと、人々は手に持てるものを抱えながら、歩いて水の中を進んでいました。壁際に流れ着いた折れた枝やがれきの山の上に立ち、ボートが来るのを待っている人たちもいました。

ペットボトルや木の破片が、私たちの横を次々と流れていきました。周囲は静まり返っていて、聞こえるのは、パドルが水に入ったり出たりする音だけでした。

私たちが家に戻る頃には、家族はすでに荷物を上の階へ運び始めていました。

家そのものは失わずに済みましたが、低い場所に置いてあったものは失ってしまいました。米袋、父の仕事道具、母が昔から大切に保管していた手紙の箱、そして家族の祭壇に飾っていた写真です。

手の届く範囲にあったものは、できる限り高い場所へ運び上げました。それでも、すべてを守ることはできませんでした。

私たちは約 1 週間、電気も安全な飲料水もない生活を送りました。母は屋根から集めた雨水を煮沸して使っていました。学校も休校になりました。家の前の道路と同じように、学校へ続く道路も水に覆われていたのですから、当然のことでした。

父は港で船舶整備士として働いています。しかし、船は陸に乗り上げたままで、周辺一帯も浸水していたため、仕事ができませんでした。たとえ仕事があったとしても、港まで行く手段がありませんでした。

親戚たちは、通行できるときにはボートで食料を届けてくれました。私たちが主に口にしていたものはそのようにして届けられた食料でした。

あの間、私はずっと怖かったです。怖くなかったふりをするつもりはありません。

それでも、小さなボートをこいで自分たちの住む地域を回ったときのことは、今でも覚えています。あのとき私は初めて、ただ待つのではなく、自分にも何かできることがあるのだと感じました。

洪水の後片づけには、ほぼ 1 か月かかりました。泥はあらゆる場所に入り込み、水が引いた後も、壁には長い間、嫌なにおいが残り続けました。

もし一つだけ変えられるとしたら、私はこうしたいです。

近所の誰がボートを持っているのか、あらかじめ知っておくこと。そして、台風の季節が近づく前に、大切なものを高い場所に保管しておくことです。

私たちの通りの人々を実際に助けたのは、立派な計画や警報よりも、古いボートを持ち、折れた枝をパドル代わりに使った一人の近所の人でした。

もしあなたも同じような経験をしたことがあるなら、次に同じことが起きたとき、きっとまた怖くなるでしょう。それは当然のことです。

でも、洪水が本当に目の前まで迫ってきたとき、自分には思っていた以上のことができるのだと気づくかもしれません。

次の台風が来る前に、家族と話し合ってみてください。実際に災害が起きたら、自分たちはどう行動するのかを。

雨はいつかまた、この場所に戻ってきます。

そして、私たちもまた、何とかして立ち上がり、ここに戻ってくるのです。

(高校 3 年生／イエンフン小・中・高等学校／クアンイエン)

2020 年中部ベトナム洪水：兵士たちの犠牲

Hoang Tam Binh

1. 何が起きたのか

私はクアンニン省の小さな農村地域に住む高校 1 年生です。2020 年に中部ベトナムで起きた大規模な洪水を、私は実際に経験したわけではありません。しかし、この出来事は今でもはっきりと記憶に残っています。当時私はまだ 9 歳くらいで、毎晩、家族と一緒にテレビのニュースを見ながら、天気や洪水の状況を確認していました。

覚えているのは、数回の台風と何日も続いた大雨によって、クアンビン省、クアンチ省、トゥアティエン・フエ省、クアンナム省などが大きな被害を受けたことです。洪水の水位は急速に上昇し、多くの地域が深刻な浸水被害に見舞われました。

テレビに映し出される光景は、胸が痛くなるものでした。救助を待ちながら家の屋根に座っている人々、学校の教科書を失った子どもたち、そして見慣れた道路がまるで川のようになっている様子を目にしました。まだ幼かった私でさえも、とても悲しく不安な気持ちになりました。自然災害によって、わずか数日のうちに人々の生活が大きく変わってしまうことを、初めて実感した出来事でした。

2. 私の体験と思い

成長した今、私はドキュメンタリー番組やニュース報道、地元の人々が語る話を通して、あの洪水についてさらに詳しく知るようになりました。当時を振り返ると、浸水した地域で暮らす家族が、どれほど困難な生活を送っていたのかを、以前よりも深く理解できるようになりました。

多くの家屋が完全に水没し、家具や衣服などの家財道具も損傷したり、流されたりしました。自宅に戻れなくなった家族の中には、学校や公民館などで避難生活を送らなければならない人々もいました。教室が浸水し、教科書や机、学習に必要な設備が壊れてしまったため、多くの生徒が何日も学校に通えませんでした。また、多くの地域で停電や断水が発生し、携帯電話の電波も途絶えたため、日常生活はさらに困難になりました。

私が最も心を打たれたのは、ベトナム全土の人々が見せた強い団結力です。洪水が発生すると、政府は関係機関や地方自治体に対し、緊急救助活動を実施するよう指示しました。兵士、警察官、医療従事者、救助隊員たちが被害の大きな地域へ派遣され、住民の避難誘導、行方不明者の捜索、食料や飲料水、医薬品の提供などにあたりました。

特に印象に残っているのは、兵士や警察官が深い洪水の中を歩き、ボートをこぎ、高齢者を背負ったり、幼い子どもを腕に抱いたりして、安全な場所へ避難させている映像です。救助隊員の中には、一人ひとりを助けるために、何時間も洪水の中で活動し続けた人もいました。また、救助用のトラックやヘリコプターも使われ、外部との連絡や交通が途絶えた村々に食料や生活必需品が届けられました。

最も悲しい出来事の一つは、2020 年 10 月 18 日にクアンチ省の第 337 経済・国防部隊で発生した土砂崩れです。地域住民を助けるための救助活動にあたっていた 22 人の将兵が、この土砂崩れによって命を落としました。それ以前にも、クアンナム省のチャーレンで別の土砂崩れが発生し、救助隊員たちは危険な天候の中で、懸命に行方不明者の捜索を続けていました。

彼らの犠牲を知り、私は深い感謝と尊敬の念を抱きました。他者を守るためなら自分の命さえ危険にさらすことをいとわない人々がいることに、強く心を動かされたのです。

私の故郷であるクアンニン省でも、多くの人々が中部ベトナムの被災者を支援するために、義援金や衣服、日用品などを寄付しました。私の家族も寄付活動に参加しました。両親と一緒に、衣服や役に立ちそうな物資を地域の支援物資の集積所へ持っていったことを、今でも覚えています。私たちは被災地から遠く離れた場所に住んでいましたが、誰もが何か自分にできることをしたいと思っていました。

この経験を通して、私は思いやりと助け合いの本当の意味を学びました。

洪水がようやく引いた後も、私はニュースを追い続けました。多くのボランティア団体が中部ベトナムを訪れ、家の中にたまった泥を取り除いたり、被害を受けた住宅を修繕したり、生徒たちが学校に戻れるように準備を手伝ったりしました。人々の生活は少しずつ元に戻っていきましたが、家族を失った悲しみや財産を失った苦しみは、多くの人々にとって決して忘れられないものです。

3. 教訓とこれからへの願い

この災害を通して、私は自然災害が建物や財産を破壊するだけではなく、多くの家族に深い心の傷を残すことを学びました。また、災害が起きてから対応するよりも、災害が起こる前に備えておくことのほうが、はるかに重要だということも学びました。

強い台風が頻繁に発生するクアンニン省に住む高校生として、私は天気予報に注意を払い、非常用持ち出し袋を準備しておくことが大切だと考えています。その中には、飲料水、保存のきく食料、薬、懐中電灯、予備の電池、モバイルバッテリー、

そして防水袋に入れた重要書類などを用意しておくべきです。また、緊急時にすぐ行動できるよう地域の安全な避難場所についても学んでおきたいと思います。

私は政府が今後も早期警報システムの改善や洪水対策施設の強化に取り組み、住民が災害時に適切な行動を取れるよう、より多くの防災訓練を実施していくべきだと考えます。学校でも、防災に関する活動をさらに充実させる必要があります。そうすることで、生徒たちは自分自身や周囲の人々を守るための実践的な知識や技術を身につけることができます。

最後に、若い世代が自然災害の危険性を決して軽視せず、困っている人がいれば、いつでも進んで助け合うことを願っています。支援物資を寄付すること、ボランティア活動に参加すること、環境を守ることなど、一見小さな行動でも大きな違いを生み出すことができます。

私たち一人ひとりが力を合わせれば、将来に向けて、より強く、より安全な地域社会を築くことができるはずです。

(高校 1 年生／イエンフン小・中・高等学校／クアンイエン)

停電の夜

Ngoc Anh

2024 年 9 月は、私にとって決して忘れることのできない時期です。私はクアンニン省の小さな農村で生まれ育ちました。台風ヤギが上陸する前、村全体はいつも以上に慌ただしくなっていました。行政区のスピーカーからは、台風に関する最新情報や、家の補強、木の枝の剪定、食料や飲料水の十分な備蓄を呼びかける放送が繰り返し流れていました。

父は強風で吹き飛ばされるおそれのある金属製の屋根板を固定するため、屋根に上りました。母は、数日間停電になることを想定して、米、インスタントラーメン、ペットボトルの水、ろうそく、モバイルバッテリーを買いそろえました。

私の家では、家の裏で鶏を数羽と豚を何頭か飼っています。台風が来る前日の午後、両親は鶏たちを風雨をしのげる場所に移し、豚小屋の扉もしっかりとひもで固定しました。

普段、私たちの庭では、鶏が地面をつつく音や、スズメが餌を探しに飛んでくる様子が見られます。しかし、その日は何もかもがいつもと違っていました。鳥たちは普段より低いところを飛んだ後、姿を消しました。アリの長い列が壁を伝って高い場所へと上っていき、トンボは地面すれすれを飛び回っていました。空はいつもよりずっと早く暗くなり、私は不思議に思うと同時に、不安も感じていました。

夕方になると、風はさらに強くなりました。あっという間に、家の前に並んでいた木々が大きく一方向に傾きました。風はドアの隙間をヒューヒューと吹き抜け、頭上の金属製の屋根は激しくガタガタと音を立てていました。雨はあまりにも激しく降り、家の前の庭の向こう側さえ、ほとんど見えないほどでした。

突然、電気が止まり、家の中は真っ暗になりました。ろうそくと懐中電灯の明かりだけが、わずかに周囲を照らしていました。私は両親のそばにぴったりと座り、風の音や激しい雨音、外で何かが吹き飛ばされてぶつかる音が怖くて、ほとんど眠ることができませんでした。朝になっても、私たちの家の屋根は無事に残っているのだろうかと、ずっと考えていました。

翌朝、ドアを開けると、家の前の道路は見慣れた景色とはまるで違っていました。大きな木々が根こそぎ倒され、道路をふさぎ、枝や葉があちこちに散乱していました。玄関先の屋根の一部は吹き飛ばされ、庭は葉っぱと雨水で覆われていました。

幸い、豚も鶏もみな無事でした。ただ、まるで自分たちも台風におびえていたかのように、小屋の中でいつもよりずっと静かにしていました。

その後、私が最も強く覚えているのは、不思議なほどの静けさです。普段なら朝に聞こえる鳥のさえずりが、まったく聞こえませんでした。時折、どこかで犬がほえたり、近くの雄鶏がかすかに鳴いたりする声が聞こえるだけでした。

数日後、洪水の水が引き始めた頃、私は庭にカエルやヒキガエル、昆虫が以前よりずっと多く現れていることに気づきました。隠れ場所が水没したため、小さなヘビも茂みの中から出てきていました。片づけの際には、ヘビを踏んでしまったり、かまれたりしないよう、誰もが十分に注意しなければなりませんでした。

台風の後の日々も、決して楽ではありませんでした。停電は続き、きれいな水も大切に使わなければなりませんでした。学校は数日間休校となり、先生たちが校舎の安全を確認し、校庭に倒れた木々を片づけていました。

家では、私は両親を手伝い、庭を掃除したり、折れた枝を集めたり、壊れた家の部分を修理したりしました。近所の人たちとも協力し合い、屋根を直し、倒木を切り

分け、道路を片づけました。誰かが助けを求める必要はありませんでした。村全体が復旧するためには、みんなで支え合わなければならないことを、誰もが理解していたからです。

私は今でも、兵士や警察官、救助隊員たちが、早朝から夕方遅くまで働いていた姿を覚えています。彼らはチェーンソーを使って道路をふさいでいた大木を取り除き、家の修理を手伝い、家屋が大きな被害を受けた人々に食料や生活必需品を届けていました。

彼らの制服は雨でびしょぬれになり、泥だらけでした。それでも、誰一人として不平を言ったり、長い間作業を中断したりする姿を見たことはありませんでした。彼らの働く姿を見て、困難なときにいつも他人を助けようとする人々に、私は深い感謝と尊敬の念を抱きました。

約 1 週間後、電気と安全な水道水の供給が復旧し、学校も再開しました。生活は少しずつ元に戻っていきましたが、台風の爪痕は至るところに残っていました。根こそぎ倒れた木々、修理を待つ壊れた家々、荒れたままの庭を見るたびに、あの不安な日々を思い出しました。

台風ヤギを経験して、私は自然災害が突然発生し、人間だけでなく、私たちの周りで暮らす動物たちにも被害を及ぼすことを実感しました。そして、事前の備えが非常に重要であることを学びました。私たちは常に天気予報に注意を払い、食料や飲料水、懐中電灯、予備の電池、非常用の物資を準備しておくべきです。また、台風が来る前に、飼っている動物たちの安全を確保することも忘れてはなりません。

もし将来、台風ヤギのような嵐が再び発生したら、私はもっと落ち着いて行動し、早めに両親の準備を手伝い、地域の行政機関からの指示に必ず従いたいと思います。

また、学校でも防災に関する授業をもっと実施し、生徒たちが自分自身を守り、ほかの人々を助ける方法を学べるようになってほしいです。

この台風は多くの家屋を損壊させ、数え切れないほどの木々をなぎ倒し、多くの家族の生活を一変させました。しかし、私が最も強く覚えているのは、破壊された光景そのものではありません。

それは、ろうそくの明かりの下で家族が寄り添って座っていたこと、近所の人たちが助け合いながら被害の後片づけをしていたこと、そして兵士たちが人々の生活を取り戻すために、黙々と働いていたことです。

こうした思い出を通して、私は一つのことを学びました。

どれほど強大な自然災害であっても、人々は思いやりと団結、そして希望の力によって、それを乗り越えることができるのです。

(高校 1 年生／イエンフン小・中・高等学校／クアンイエン)



Artwork: Le Dang Quang, *Xóm nhỏ sau cơn bão / The Lane After the Storm*



Artwork: Ngoc Duong, *Trực Thăng Cứu Hộ / Rescue Helicopter*